

寄稿文

タイトル	ファッションにご用心(ある推理作家のエッセイ)	氏名	芋坂 達文
------	-------------------------	----	-------

しばらくはスノーボードを休むという話をちらっとしたら、どこから聞きつけてきたのか、だったら別のスポーツをしようよといろんな編集者が近寄ってきた。彼らが提案するスポーツはただ一つで、それはゴルフである。

「ゴルフ、しましょうよ。楽しいですよ。どこでも案内しますから。ゴルフ始めてくださいよ。ねえねえねえ。」

まあ大体こんな感じだ。いわゆる接待ゴルフというやつだろう。もちろんそれにかこつけて、自分たちが会社の金でゴルフを楽しもうという魂胆なわけだ。

常々不満に思っていることだが、接待というのは、相手が気に入っていることに付き合う、というのが本筋ではないのか。 — 略 — だから編集者が私にすべきことは接待スノーボードなのだ。接待したいから、あんたが我々の好みに合わせてくれ、というのは筋違いだろう。

とはいえ頑固なことばかり言っても始まらないし、スノーボードに代わるスポーツを何か見つけたいと思っているのは事実なので、とりあえずゴルフもその候補の一つとして考えてみることにした。

じつを言うとゴルフをやったことがないわけではない。十数年前にはレッスンに通ったことも、コースに出たこともある。とりあえずの目標だった100を切ったことも何度かある。

長続きしなかった理由はいくつかある。バブルが弾けて友人たちがやらなくなったこと、そもそもプレイ費が高すぎることなどだが、私にとって最も大きかったのは、ゴルフ場のあのわけのわからん高飛車な態度が気に食わなかったことだ。キャディーにチップをやらなければならないという暗黙のルールも理解できなかった。「今はそんなことないですよ。プレイ費だって安いものです。ゴルフ場も経営を維持するのに必死ですからね。高飛車なんてことは全然ありません」

多くの人がこのようにいう。たぶんそうなんだろうな、と思う。だったら始めてもいいかなとなりかけたが、ある事実に気づいて、またしてもやる気が萎えた。

その事実とはゴルフファッションに関することである。なんでまたあんなにダサイのであろうか。よりによってそんなんでなくてもいいだろ、といたくなるほどの野暮ったさだ。某出版社のS君も、仕事の付き合いでどうしてもゴルフをやらざるをえなくなったそうだ。そこでどんな服装でプレイしたのかを訊いてみた。彼は憂鬱そうな顔でこう答えた。

「それはまあ…例のああいう格好ですよ。変なポロシャツを着て、下はスラックスってやつですか」自分で変、と思うような服をきなければならぬスポーツなんて、やって楽しいわけがないのだ。S君も仕事絡みでなかったら絶対にゴルフなんてやりたくないし、あの変なポロシャツだって捨てたいのだそうだ。着ているところを彼女には決して見せられないともいった。

これは断言できることだが、ゴルフが若者に人気がない最大の理由は、あのゴルフウェアにあると思う。あれが間口を狭めているのだ。

「だけど以前に比べれば、ずいぶんましになりましたよ。タイガー・ウッズなんて格好いいじゃないですか」

こんなふうにいる人も多いが、ウッズはウッズ本人が格好いいのであってファッションがいいとはとてもいえない。ほかの服をきたら、たぶんもっと格好よくなるだろう。ちょっと調べてみたら、日本人ゴルファーのファッションセンスは世界的に見てもひどいんだそうである。 — 略 — で、こんな服を着た人たちが集まるゴルフ場そのものが、ダサーイ場所というイメージを持たれてしまうのだ。ゴルフウェアには一応きまりがあるらしい。

— 略 — こうしたルールがある以上、ゴルファーたちのあのファッションもしかたないのかなと思う。

たぶん中には一生懸命自分なりのおしゃれをしている人もいるのだろう。それにしてもなんでこんなルールがあるのだ。紳士のスポーツだからか。しかしちっとも紳士に見えないぞ。 — 略 — とはいえ、あの変なポロシャツはやっぱり着たくない。というわけで、ゴルフがポスト・スノーボードになる可能性は限りなく低い、という結論に落ち着くのであった。

※東野圭吾作「ちやれんじ」から抜粋

こんな記述があった。一方的なアンチゴルファーの偏見に満ちたものではあるが、私自身これを読んで思わず吹き出してしまった。しかも電車の中である。一瞬、周りの視線が自分に集まるのを感じた。車中の読書はとても楽しいのだが喜怒哀楽を出し辛いのが難点である。

本題に戻るが、身に覚えのあることをチクチクと針で刺されるような妙な爽快感を感じる一文だった。